伊勢参宮名所圖會　二

ル4
3526
2

伊勢參宮名所圖會卷之二

目録

勢田橋○古戦場○頓宮旧跡 ○龍神祠○俵藤太祠　栗太郡○旧里○栗太樹　勢田驛

建部明神 牝翁放牛　大萱新田 月輪池　老上川 玉水の池　樫原

野路玉川　草津驛 栗の化石　乳母が餅　山田矢橋

鞭嵜八幡　立木明神　常善寺　草津川○下新屋敷

岡村　同川　坊袋　川面 同池

灰塚山　勾○手原○小野　三上山○櫻山　梅の木 是斎

善光寺　上野○林　伊勢落○金山　甲賀郡 旧三郎左衛

石部驛 吉彦吉姫の社 落合川　里夏見○吉永○三雲 山夏見○田川　阿星山 東寺 西寺　柑子袋○平松

針村 同川　横田川 施室岩 烏帽子岩　泉○北脇○林口

馬場先八幡　水口驛　大宮社　大徳寺

昭和十六年一月十一日寄 尼野貴英氏贈

門 ル4 號 3526 卷 2

大圓寺　城山　正源寺　布引山
栗林○彩城○小里　弁形石○岩神　今在家　稲川○清泉碑○金毛院　瀧樹明神社○伊佐川○[illegible]
大野○德原　市場○荊野　松尾　松尾川　土山驛○一里山○荒神碑
田村明神　田村川　田尻野　○稲荷明神　蟹坂　蟹塚
猪鼻　山中○聚楽寺　榎○澤　勢州境
鈴鹿山○三神山○坂本○田村社○鏡石○猿坂　鈴鹿社　同[illegible]宮　鈴鹿川
橋弁天　伊勢海硯　岩窟観音　坂下驛
金藏院　小女溪　法安寺　燒地藏
沓掛　楢木　一里山　朝日弁天
權現山　四軒茶屋　筆捨山　羽黒山　寄石
茶鍋淵　一瀬　同川　大黒石○恵比須石　長枕石○ころび石　関驛
御影塚　清見原天皇坂　鈴鹿関跡　関地藏　同開眼供養

忍ぞ桜　久我白石明神　城跡　三日城
和琴橋　川上瑞光寺　[illegible]　湯津盤　同森　清岸山福藏寺
追分　関川　古驛　楠原
天神社　同森　観音堂　中縄　椋本
片淵城跡　高野尾　豊久野　砂掛松　野崎
土岐百塚　窪田　光明山安養寺　六大院
空也堂　坂部　倒櫻淵齋塚　一の宮
一身田高田專修寺　三軒茶屋　中野
大乃巳所神社　太部田　小丹浦

勢田橋（せたのはし）

風雅集

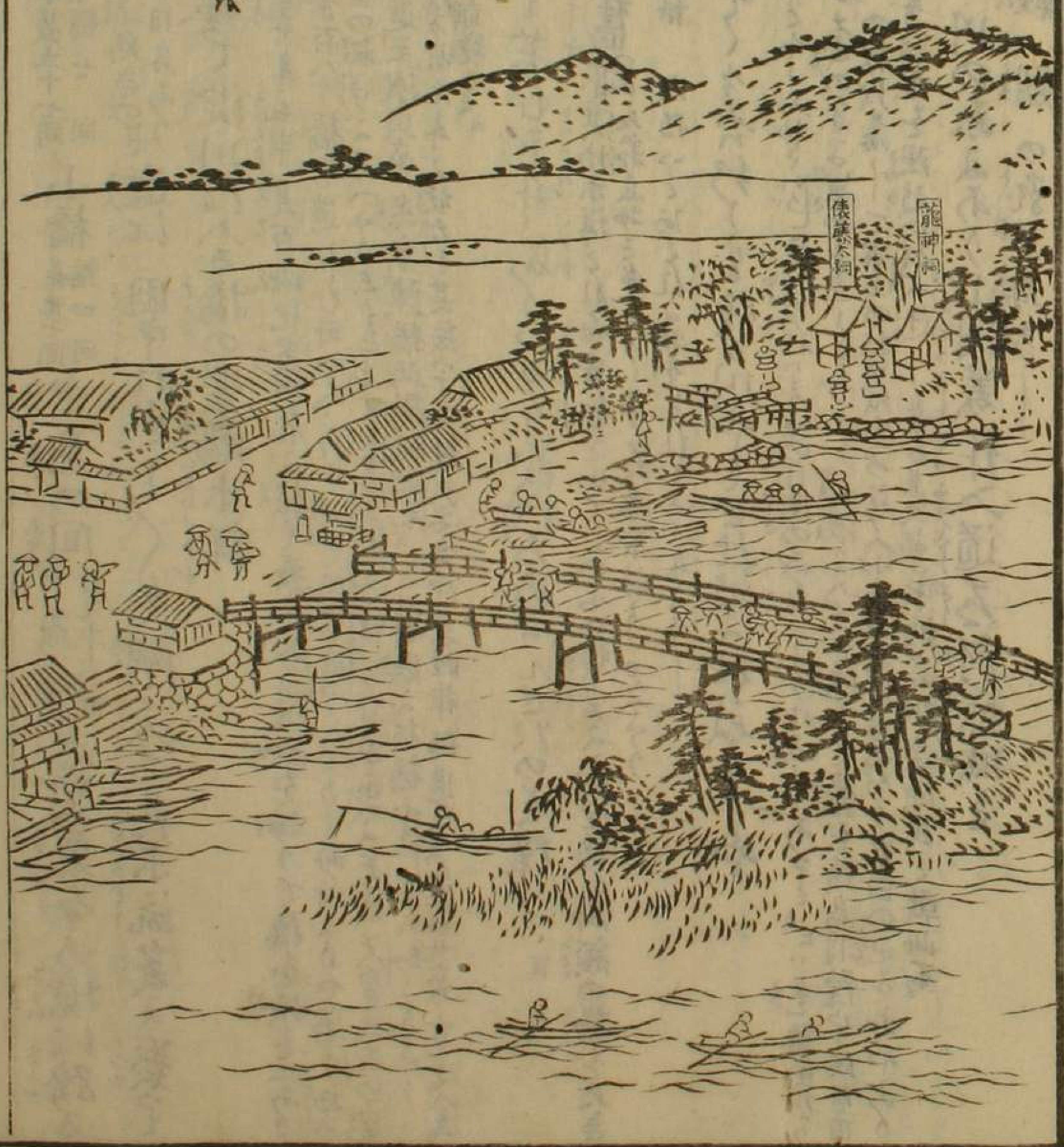
貢きの絹そすのる東路乃勢田の長橋打もとゞろに

兼盛

発句

五月雨にかくれぬものや瀬田乃はし

はせを



勢田橋 大橋長九十七間幅七間 小橋長廿七間幅四間 中島の間十五間合長し百九十六間 志賀栗本の境に跨る
長橋唐橋又ハ勢多の長橋ともいふ又大和に日名あり 近江国中れ水ことぐく湖に入て其末流爰に聚て
宇治川を経て淀川に入る橋の濫觴未詳
或説に推古天皇廿年壬申夏百済化来の者に能く長き谷川の流を知りて橋を渡す工あり即本曽披其余百八十橋を造りし時の人これを路子工と呼ぶ此時よりや造り初めたらんと恵日堂の秘書に見へたりといへとも此書未詳焉。日本書紀天武天皇元年の条に大友の皇子の戦に諸将進至瀬田帝悉衆陣橋西撤板拒之云。此時既に板橋ありしとハ知らるゝなり。或書云後一条院万寿元年に焼失を其後宇多院弘安年中思性律師造之云又日本帝寛文八年二月橋の掛二年自焼るとも云

新古今集
様の板も苔むを斗ありてたり幾代かならんせたの長橋　匡房

勢田頓宮の舊跡 其地未詳これ孝謙帝宮都を出てこの所の頓宮に入らせ給ひ御額の櫛をぬき投げ給ひしとぞ見へたり
源氏排　大ねつと伺されに拙やされてさか本にさして
ふりをてゝちのみ給ふも猶ゝ川やそせた波に袖ハぬらしや

勢田古戦場 承久の乱に宮すとつとてゝ官軍さかにてを指さし君をもとりけるけるの日関のあらさより流し来るとぞ云○此勢田ある大友の皇子軍やぶれてくるひしく山限にありて縊えて薨ぞ後鳥羽院宇治勢田の橋を落しを以て軍士の指揮ハ東寛義時段のかり勢田の色をおやぶり京都まのり後鳥羽院を隠岐の国へ迁し奉る兼久記○中納言知盛源氏と戦此所

○**勢田城址** 川の東にあり山岡美作入道か阿弥城主

○勢田鰻 鯉 鮒 の数名産多し

栗太郡 勢田川より東をいふ 昔此地に栗の大木ありて郡名とん
今昔物語云むかし近江国栗太郡に大なる栢の木あり圍五百尋なりて木の高さ枝のほびろかることいふむかしなるべし其蔭朝には丹波国にさし夕には伊勢国を覆ふ霹靂大風にも不動さりける間其國の志賀栗太甲賀三郡の百性此木の蔭多くて耕作するとも田畠の実のらぬけれハ則採守の宿祢等に依て此木を代倒しけるに其後老鏡しけるより其所の百性の子孫今に其郡にありと云
つ栖るの此物がたりれハ栢の木らしきけれども大木其地にありて郡名に成るとその例ある
わ津くもなきなかのうやの栗の葉らしき栢の業な例するかなまでのかへれはつかうめにへる五栗と
もハ栢といひしなるべし今にも其業兵坪ぬるにあり里人これをスクモといふ

栗太里 夫木集 ふるくいえへは 名のみまことにまこと秋の野の栗りなしや

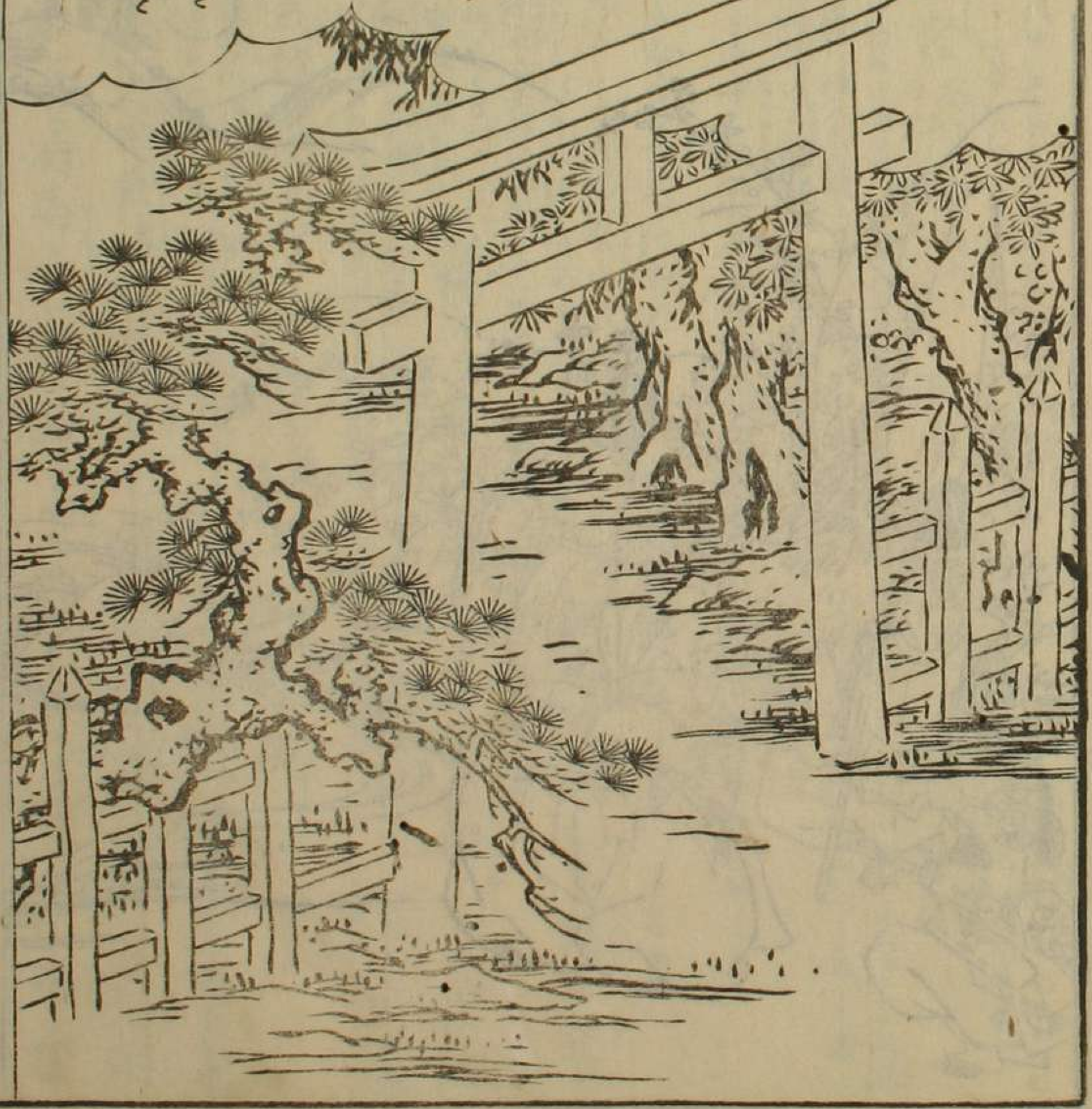
龍神祠 ○**俵藤太祠** 橋の右ならび両社ならびあり秀郷ハ孫将門の辺を道き郎下馬し
て小刀鞍鞘を等を中へ投ド拝して去らぎれバ必雨ふると
いふ○あれハ公の従人されども小祠橋の上にも今ハ公より修補し経へずむ昔
まはしの風説をいひ繁ふるてすのみべきともなれど繁ふらくいハ是橋姫明神の祠なるベし
橋姫守護の神ハ山城宇治橋伊勢宇治橋淀の橋ともに橋姫の祠ありと経し秀郷ハ河内
藩生氏の祖ともあるハ着より其氏の神をまつり来るならんも古きかるべ

勢田駅 古神宮勅使進発に会坂の関を出て近江在兼到勢田駅国
司差供給次到野洲河板云云 江次第

建部明神社 栗太郡一ノ宮也 所祭大己貴命天武帝白鳳に年の勧請豊
葦原一宮の中の其一とと云 神社啓蒙 武部大社一宮大神天目一命之云云

平治物語頼朝遠流の条下曰盛安も
大津までともしたりし人にぞ候ひける上
せうとは機も早くて弁にてむくの法人
こまかに語りけるはよくしてお送り
なかの社の所へなる所ゝある神
そと向かへ参らせば明神とも佐殿
さらへ今夜は御前に通夜して
功徳の祈りをも申さんとて
まゐらひかる夜ふけ人しづ
まりて盛安申しけるは夢想
御出家あるべからざるよし
せしは不思議の夢を見て参り
よし故之君はじめ御前にて
八幡宮に参りて大床に座を
盛安御供して石清水の上に
何ぞ思へば十二三計の童
子弓箭を持ちて大床に

て世語らふ義朝が弓
やなぐひ持て参り
てふとや置れ
うは御宝殿の
内よりけだかき
御声にて添く
やさしげ給ふ
義朝は語りけむどるぞ
先義朝に食せよく給
られば天より抽杉て御
舎差せ申す行母らんと見
まれば物の小びとを抱く申男
それはこの給ふる夢へて
御治世の六十六本
それの御方の法
押ぎりて三口ま
いりて盛安に
世語らひを懐中
なりひは下男



旧事記二見ゆ　○祭礼四月中午日之古ハ大社之名なり。○大萱新田　○月の輪池　村の入口にあり

老上川。鵜の宮　田猿彦を祭る今ハ其形斗なり　濁の池の中にあり。○玉水の池　右にあり　街道の。○榿木原

本地弁才天を祭る

野路玉川　日本六ツの玉川の其一ツ也此名所ハ街道より一町斗左へ行所にあり水涸ありて萩ハ咲るも趣しからすなかく見えて所の人ハこれを玉川と押し也。

又廿一代集歌字名所又此後の山道此路の遊條原此圖の名所ともされ跡りもなり

草津驛　此驛中より中山道木曽海道の岐路あり即標石を立る

千首
草津より湊に出る方あれやえやめにて頼志賀れうし舟　為尹

乳母餅　家建足羅にして且玄関築山あり絵堂も結ハ美人の餅のうり実ハ図の傍に記と

○乳母が餅の形ハ御製とよせらてにも不恥。此あたりを矢倉といふ

山田矢橋の舩場　何もも草津よりハいしが　標石ハ矢橋の舟場まで廿五町と記せり即家の傍にあり

西小の湊なり　石場より舩にて渡るが五十町の海上也山田の渡

ハ色手荷物を渡を　絶景いちん方已勝示の燃ハ布を張く盛なるがごとく南ハせたの橋

ちかくと見えてし其余湖辺の眺望もて爰押ひく一景を

堀枝百首
みほてるや矢橋の渡する舟をつくそうひくハせてれ椿也　兼昌

鞭崎八幡宮　矢橋町の傍にあり　祭る三月四日
祭神三座中ハ神功皇后左ハ住吉右ハ高良也

天武天皇白鳳四年大中臣清麿勧請之傳曰建久元年十月二日頼朝

上洛之時此祠前をとろ附馬上なから鞭を以てさして、いるる神ぞと浦人ニ

乳母が餅

むかし近江源氏の正統佐々木左京大夫義賢といへる
永禄十一年九月信長にせめられ其子義尚と共に滅
の時まで御代々のかゝわりのありしが事にかゝりて
せられし時幼児三歳なるが有り最期に臨んで其乳母を招
やよまうきこゝろをなひそかにかくし育てよと頼ミし
こゝに附属し給ふ乳母こゝろ弥かに其子を抱き斧戸の
藪より切ぬけて泉を渡ひ月のさされし営
所のほとりにてめでたく餅を製して往還の
人に売出し大名高家の重招もうけたまはり其家
情をこゝろせしにいよいよ売れるまでありてはかり
ぐさくて守りなげきるまじくば
自らそ信家と盛にてこれと云ふ
人多く参遊に
小店なれ開きけ
るは是と求る
往来の例となりて
乳母が餅とぞいふ
てあやしみの○さて
幼児八十三才の
往掌文のころに
ふ門よ入りし長
もろふ及んで家

所高家其人を招と
なるひて産業の
神へ足腰を
と努て男子二
同き近江居某
人あり二人とも乳飢
の家督相続して
ほ同流の系統と
なして仕ゆせしめ二人
い為ひね績させて後
に乳を其子のいまだ産
を失ひ大坂へ行き流て
本某として醤油を
紛ひける其子は尚良宗
の刀へ始終べしとぞ
まぞ
乳母が家の代々は続
きて繁に家へ
ふるく乳母が忠志か
ちまとも実には是ぞ
盛衰貴賤の理に
勝りて栄え
ならざる
ものなし

矢橋の

粧杭集月の夜舟とふ文
物語にむかし湖水に
舟なかりし浅海なりし由
しか此舟の出来る由
然に志賀の浦に月
と人独女なるが愛の
うちなる枕をうれて
睦ひなる男ある夜流
に流して舟に乗る
彼ころつきまん我ハ山田
に年経る楠の大木
ありしが其木を切て
舟に造り湖の
のかよひせんと家の
守より浣にあを切
べしと定りぬ然ども
其舟多カ人よりてもいら
でうごかし其の時女

胎内に孕しなる男子
を家の守と思ひ終に
舟に乗るべしと
其約をなくふしなく法
外の面に立て扇ふて
さし招くが忽ち舟ハ走
るべしと思ひの念ひを切
りてかきけして矢なおん
の如く舟の動きしが恥しへのま
まつひ出て其れかな
とげるとぞ

此物語ハ三井寺の諸大山田
矢橋の渡し舟の旅ハ
人なしとも月のさそひ
自ら舩もこがれ行らん
とも浦に付くの戯絵と
ハ見えねども一興の興に
備ふのみ

君が代は八幡宮のまへを過ふに大将急ぎ馬より下りて偈仰ありこれより国てぬ衛とはありしと云
○按るに天皇の大かく遣るお古制之草津の邸首より織を制して奉りし又其蔓と神の靈樹とともいふ又神社に立木明神とふふあり是又蔓の靈樹ありて終に神木となす今もその枝をなせしうしるともみえ今その繁の鞭の蔓なりてそひ合とれば昔此地に大なる蔓樹ありて稀に神と鞭と結ぶ其の墨なり草津產は竹の根なれども昔は蔓にて造りしよも今ブチブチお訓ふて鞭ともブチと云
立木社　札の辻にあり　正一位立木大明神の額あり蔓を以て神の靈樹とも春日明神を祭るともいふ神なり謝あり是郷中の格式て良家鈴氏の分孫をお明にせる
附言　馬丸光廣公崇敬記云やむかし草津と通る人の遠ヶ栗木に向ひ得るあらみえて本海の森あり里人に問ひて春日勅請とそしからいへがごとて
神もまつかくとさしてまだあらん然も春日社家とてそこはけ
○私に曰此地の駅舎に蔦屋某といへるあり其家に今祝月十三世にて家号を蔦屋と称ふるもの又地産の縁ありて似よりて姓を名乗るに今名字を又たる人草津より守りにまでを預り其時よふての家に秘蔵とする化石あり是は栗太郡の栗の大木のかたりなることれに亞相中山君の記あり又黄門日野君の詠あるを弦る

裏

表

化石之譜見於邪代碑禰湖東石亭所録之雲根志品類有数属者近江國栗太郡草津驛舎長駒井某者持栗樹化石来而乞其名且記之方今獲審親之其髙二尺餘斧削痕存而不煩琱琢自然成置崖層峰之形峭壁攢峰之勢尤足愛翫焉淵明栗里碑石之名何啻栗本栗石之奇不啻悦目而適心而已不騫不崩永世宝傳應爲一郡之靈鎭矣今名之以活人之享蓋栗子其功是以活人石丈宜襲其德捨無竆因書以還之云
寛政甲寅晩秋
前権大納言藤原愛親
従一位
資枝
○近江國栗太郡なりの化石を
それをはさらへしみりのむかしは本はいまからぬりてやくにくらちせん
常善寺　由緒有寺也縁起略之
草津川　村なる土の小川なり　○下新屋敷○岡村　後に本高札の墳あり　○目川○坊袋○川面
川つら池　右の方にあり
附言　草津より石部までの間九百余村にも及びて表に紙を製を近江一国の名産にして月草の花をもみて紙に深浅を其葉の名俗よ籠草をうつし花がうし花ともいふ
匝塚山　方より纔なる川面村の右の上古の大栗の樹の枝葉を焼る灰の山にぬくろと云
鈎　まがりあそんたる足利義尚陣営の地之陣中にて發程あと尤氏傳を講ぜられしとぞ
手原　ともいふ又俗よ手原村　稲荷の小祠あり此村に昔手を祭ところのありしとて手原村ともいへども慥むべく及びて祈りのつくまでに戯言の抽ぐうれ漢和とも多し
號よ山中一夕話といふ書にも鄭縣の賈人が妻まの賈の主として出し給ふて伯氏が手を以て捲を称し蔵して奉る意ありと云ふ
○小野

草津
立木大明神
拝でん
末社

左東海道中仙道
立木大明神
末社
本社

三上山

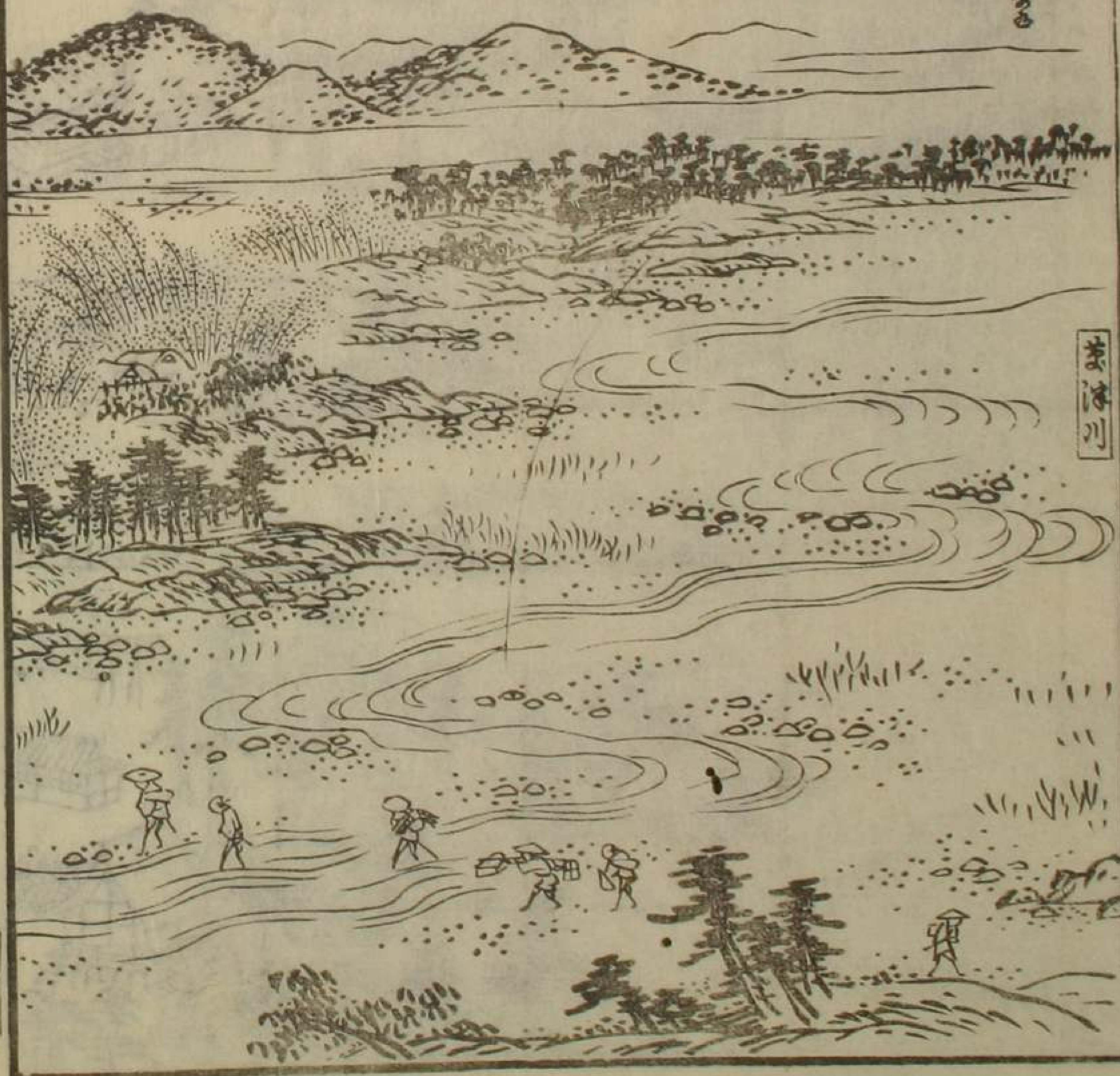
一名蜈蚣山ともいふ 連山は横山とも云又名有青谷山

益須郡なりこの山の
右に見ゆる山蒼樸として
ふもとより山をのぼれば絶景
いはんかたなし 麓より三上山の
頂上三ツの峯ありてふじに
似たり

附言 伊勢物語七ケの文を
其書によし塩尻といふこの
三上山の異名也 其うち
うたに似されべからう
赤人の哥に

さゞ浪の三上の山も
海なれや
月まさしほの
塩尻のやま

今按ずるに哥をとりて其儘
ところいよく拠なりつゝ
なし 其外此哥ふでを



志賀ありといへるなるべし
てふ哥もそらの似たる歌
後人の作意にしもく
よくとるなるべし 此哥
赤人とのみ見えれるは
七ケの文の知ところあらん

富士御覧の記に

ならひ立
富士のね
遠き
傍きをく
三上の
山のたれ雲　尭孝法印

三上社 林森の三上村にあり

祭神天御影命 当宮の
[illegible]

梅の木　六地蔵村に昔大なる梅の木の茶屋あり
て梅の木茶屋といひしより終に地名によぶ

是斎　和中散　元祖津田宗左が若年是斎と今は代く織田尭十郎きりて孫と業は寛永
の比より貴姫ゆゑなきとぞ医書に和中散の名は漢くして薬方は悉く異之
此薬は和方にして医書にかんがふれあらず此家に元利家の類といふものあり松永貞徳
和歌本序の侍など云そふらう〇目村に定歳と名乗て家道の名誉別に立りといふあり此名
を大隅弥左衛門といふすべて和中散は此地の名方なり

九品山善光寺　融通念仏宗　〇上野　〇林　〇伊勢落　〇金山　右の方に名所あり金山の御前は六十年来のもの

甲賀郡　昔は甲賀三郎の事〇伊賀地志甲賀伝記曰醍醐天皇御宇信濃国望月明府の住人望
くこの辺にては石灰を焼ものなりし　月方三郎兼家といひし勇名あり男子三人あり嫡子望月太郎
次男望方三郎兼家三男望月三郎兼家といへりまろうに若狭国為盛山の賊近代の勅をうけむかひ
兄弟三人発向せしに乾中兼家武勇をたれて賊徒のくるしみ誅伐を兄の三人其武功を損んでふりき
谷へ突落し二人の名をうしなはんとはかりぎる命を全ふして月を経て立かへり二人の兄を見
て行末なく逐電をせしに兼家に与し宮人が其地を合せてく武威をまもしく強大へ兼平の法相馬将門
退治の時軍功ありしによりて近江国甲賀郡を賜て甲賀近江守と改む後伊賀まで国を領り子孫
佐那具に居城を其墓は同国阿拝郡一宮の奥観音谷にあり

石部驛　後のしがいそべのしらみ
万葉　白檀石邊山常石有命哉戀乍居
〇代匠記曰古今集に棒弓いそべの松とつづけるまれ人麿と住せり又佗く本家旅に従ひ
しへうり破邊某と云ゆゑありかの萬旅重代近江の住人なれば破辺も亦の名所氏とせり
此歌ふやくとも云〇右よりも人麿は近江の國官にてくだり且しるす彼集に入るまでばかりさく
疑ひなきこと多きなるべし

目川

田楽はもと田楽法師棒のさきに立付てをどる其形に似たるをもつて号しなるべし

新勅撰夏

夏衣ゆくても涼し梓弓いそべの山の松のした風　家隆

石部社(いしべのやしろ)　石部の町のうしろにあり　延喜式甲賀郡上の社は吉姫大明神、下社は八座の内吉彦大明神を祭る　世記曰、倭姫命阿佐加潟に渡りおはしましける時、多岐連等が祖宇賀吉彦が子吉比女吉彦二人来りあひき。其所吉姫地口の御田并に麻園を献ずるとなん。是より因て禾宮には由縁ある社なり　啓業

落合川(おちあひがは)　白雉川をいふ。東寺村西寺村の境にあり、此所にて落合ふ

▲阿星山東寺(あせいさんとうじ)　長寿寺といふ。天台宗山門の末。石部より十八町西南にあり。本尊地蔵菩薩。開基聖武天皇建立。清和天皇再建。此寺開基よりこのかたの宝物あまたあり

▲阿星山西寺(あせいさんさいじ)　常楽寺といふ。寺号勅額、三重の塔あり。東寺より八町程西。天台山門の末寺。此二寺を共に阿星山と号す。両寺とも鬼儺の法会あり、其名を鬼儺会といふ。西寺は正月十八日、東寺は正月廿四日なり。鬼儺の面、聖武の御代より伝へて甚古物なり

柑子袋(かうじぶくろ)　其数多し、実もすこぶる堪なり　○平松村(ひらまつ)　此村の右の方の山に美しき松といふあり。一山凡二町余の間悉く松にして、其生ふる形一樹にして根下より数十幹を出す。甚奇観なり。伊勢国

針村(はりむら)　入口の小川、針川といふ名所なり。松葉集に伊勢国の名所とするは誤りなり。姑く爰に加ふ

家集

かり衣ぬれて針川の青柳の糸よりかけて春も来にけり　躬恒

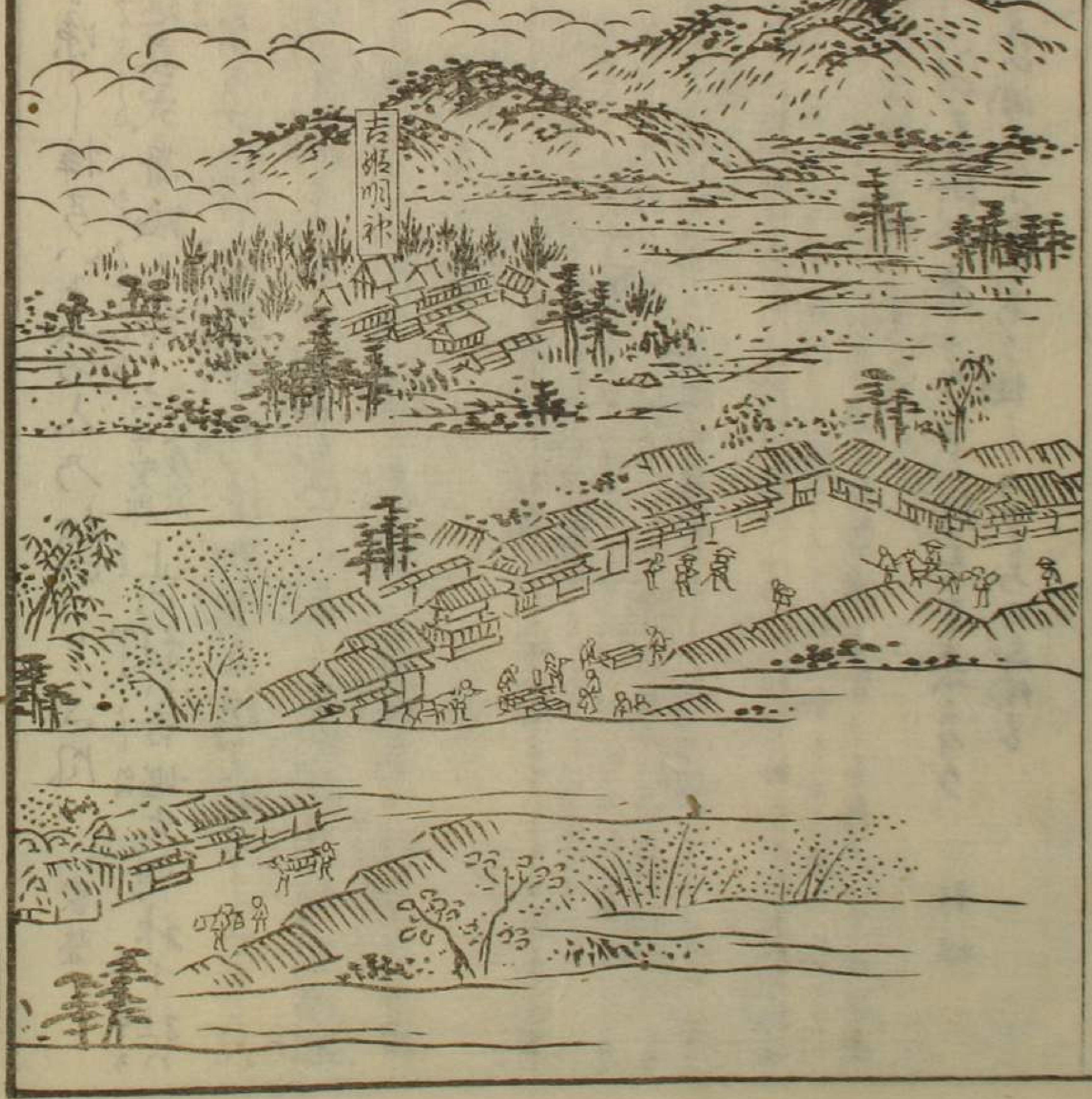
里夏身(さとなつみ)　近江に夏見の浦といふ名所あり。但し此ところの名所なるか未詳

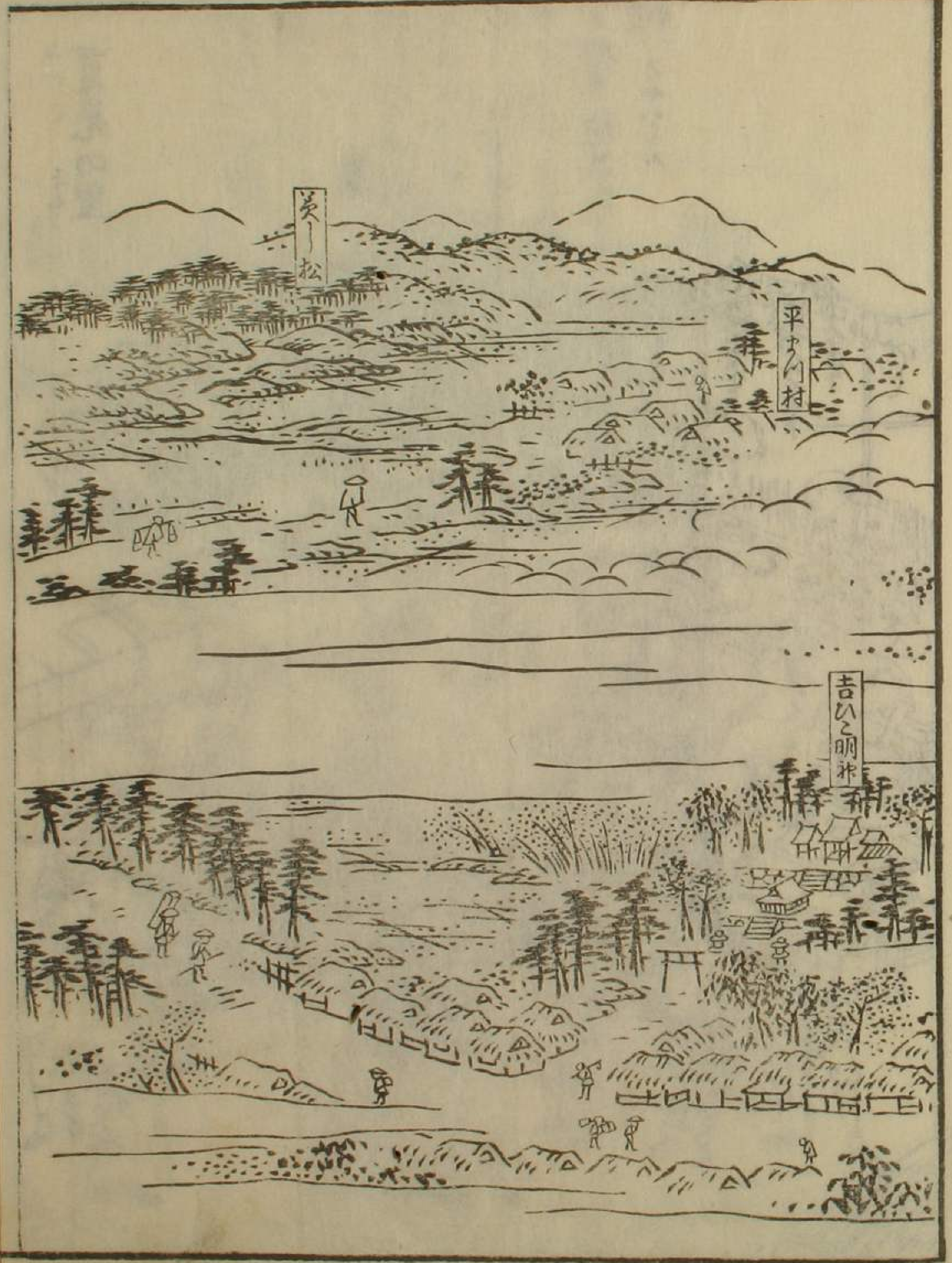
梅の木(むめのき)

延齢を経る春にあふとの清香を発すれむめの木は薬より　信海

石部驛（いしべのえき）

宿のひがし平松村の後の杪ちに美し松といふあり





二本松

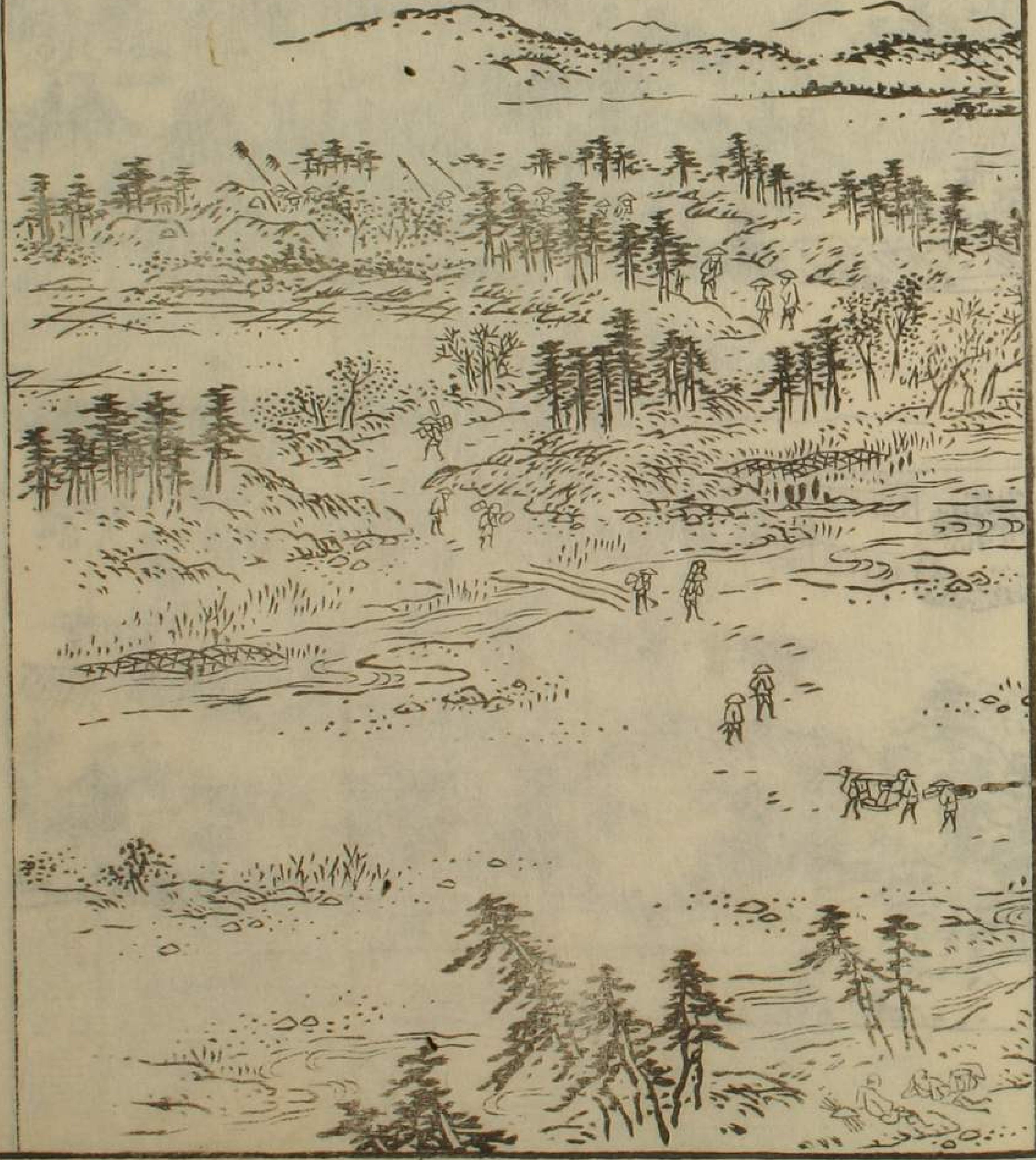
夏見の里
方丈記に行水の
流ハ元の名
よみし流と見え
此本偶の紛縁
れ元の水にして
去りも蚤疎をもて
ずあるふ色をそぐる袖
と枕ぎ紙まらひし
髭とやいうん

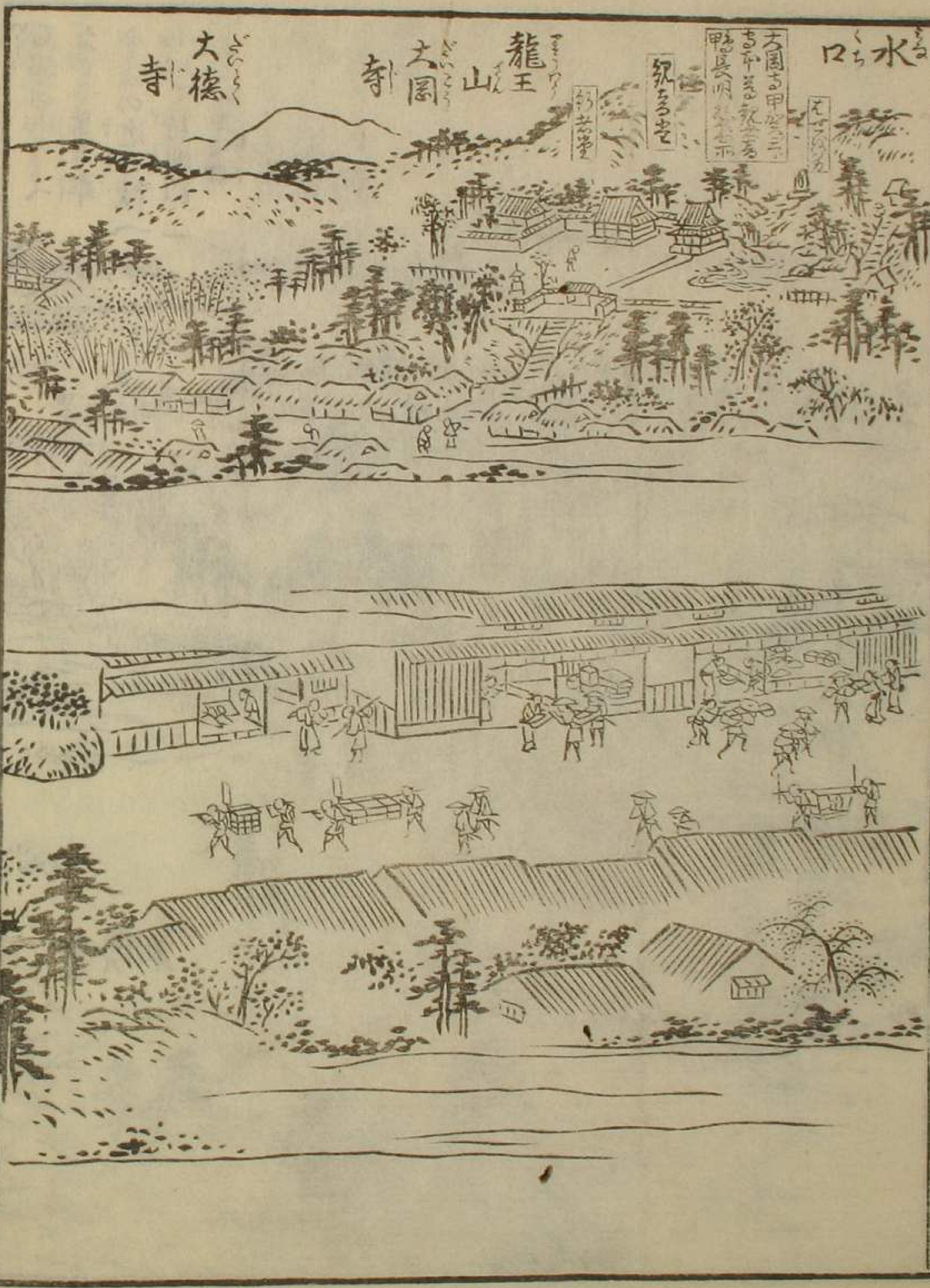
横田川 一名石部川原

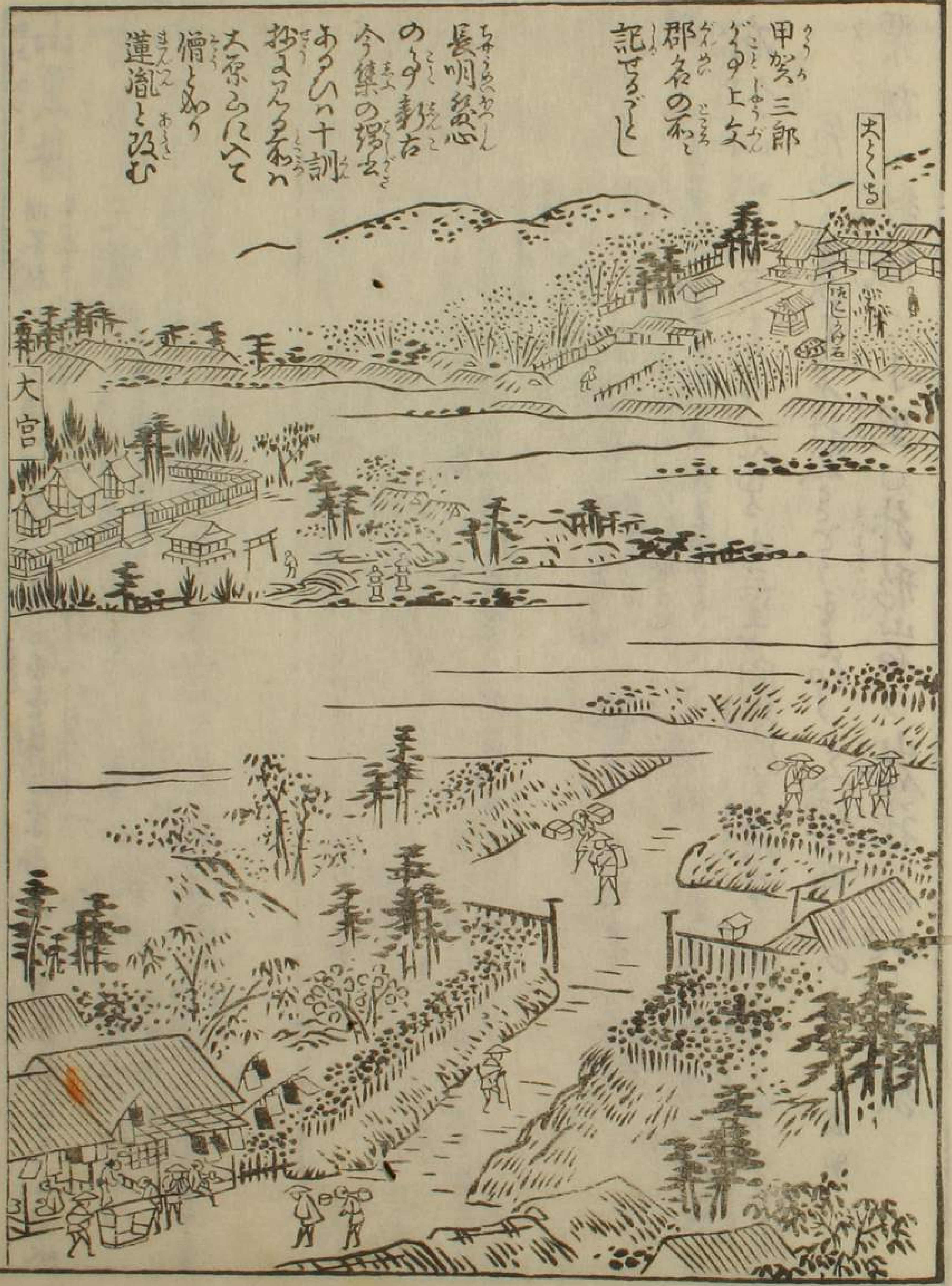
夫木
横田川石部川原の蓬生に秋風さむミ都恋しも　長明

源は甲賀郡大河原の山谷より出て杣山の東北へ出松尾川となり西南へながれて酒人村の東西にて野田川と合し横田川となり南より又西北へ出て

石部の北へながれ栗太郡金山の近辺にて野洲川といふ是より北西へ流れ山賀村のほとりより湖水へ入る




水口
龍王山
大岡寺
大徳寺


甲賀三郎
郡名の所と
記せるべし
長明発心
大原山に入て
僧となり
蓮胤と改む
大宮

山夏見 此所は横川の名酒又は串とろもよし名物を售る茶屋多し其家毎にえんし里水をまかけ木偶をめぐらして旅人の目を悦ばしむ

吉永 ○三雲村 寔に横る塚跡右の方の山にあり 江南六角家旗頭三雲主馬之助 ○田川 小川あり横田川 西の岸なり

横田川 土橋あり○西の方に山あり 横田川といふ川の中の画上に在 ○梵字山石 ○烏帽子山石 あり つゞきも川中にある石也

泉村

光廣卿道の記に泉といふ所にて

夏の日もゆくてにぬるき風よりも泉とやいとしるきなりけり

北脇 村の内に八幡宮の社あり ○林口 ○馬場先 南の方に金法山飯道寺あり岩本院といふ修験者あり是より大岨山布引山まで参詣をする

正八幡宮社 水口本戸の外を林口といふ是より左に川枯の神社への岐あり俗に山村天神といふ其神木に神縁石あり神人是を祀て犯すことなかれとす

水口驛 御旅所筋廿丁余 裏所十五丁余

大宮社 城下の東にあり ○大徳寺 浄土宗 子細画の上にあり ○龍王山大岡寺 子細画の上にあり

城山 大岡山といふ俗に甲賀山といふ 慶長の比長束大蔵少輔在城する所なり ○正源院 秋葉権現の社あり

布引山 水口れ出口より左に見ゆる山三里が間岑に白き紙をすく織に布を曝するごとし

名寄

嵐ふく雲のはたそれぬきとうすみ人ぞ織る布引の山 長明

栗林 ○新城 ○小里 ○升形岩 ○岩神 ○今在家

稲川○山口志兵衛重成清泉碑 稲川の土橋を渡て左の方より三尺斗の石井の内に清水あり其上に石碑を建る 文に曰

山口志兵衛重成者勢州之人也本性住山氏初名盛治號三左衛門其父甚左衛門吉久仕飛騨守蒲生氏郷領鈴鹿郡住山村娶小川左京女生一女三男長曰内記也盛治者其弟也氏郷移封奥州吉久亦從之盛治及十八歳來江府事修理亮山口重政慶長十八年重政及嫡子伊豆守重信有故件旨竄于武州入間郡生越龍穏寺重治辛勤竭力奉之元和元年攝州難波戰重政重信属掃部頭井伊直孝下攻之河州若江重信一番合鎗先獲首級其身亦被瘡冦兵進至盛治從其役與同僚両三人擊退來肩重信帰陣重信得免既而没重政嘆盛治戰功践群示感書畀山口氏及其諱字且授家紋於是盛治改稱山口志兵衛重成乱平之後重政赴高野山欲至南海使盛治事雅樂頭酒井忠世寛永五年遇赦帰江府仕幕下釆邑依舊同七年重成帰仕重政同十二年重政易簀次男修理亮弘隆嗣其家重成勤仕如故正保四年弘隆奉台命守江州水口城重成從行水口土山之間水乏行人苦渇重成聞山麓清泉湧出盛夏不涸掘井于稲川畳石爲甃大爲行旅之便兼應三年五月十六日重成病死年六十九號即翁了心其後經年土崩石傾其子志兵衛重主頃間追其志畢修覆之功依伜者請記父之履歴固辞弗措乃述其大槩作一絶示之

從役難波揚勇名　稲川療渇本源亨
清泉日夜流無盡　洗出忠心一寸誠

延宝巳未冬　整宇主人春常法眼林重民識
孝子山口志兵衛尉重主建之

金毛院 光子内親王御筆の額あり

瀧樹大明神

倍佐野○今宿○大野○徳原○市場 倍場ともいふ ○前野

松の尾村 右の山上に松尾大明神の社あり 毎年四月亥の日祭す ○松尾川 一名卿の白川

土山驛 西の入口に多賀の標石あり ○一里山○幾里野 これ土山の出はなれより行して明神の前を經て人のふむよろしく不あり是は松村の不 切抜新道より開きし不る是が其根の跡ありてかくいふとなり

田村大明神の社 村の出口に青銅の鳥居 正一位田村大明神と額に書 坂上田村丸の霊を祭る 別當あり神宮寺といふ

田村川 橋あり 明神の傍なり 一名白川

田尻野 郷の左右の地をいふ 右に観音堂あり其山上に一本松あり○猪鼻明神

蟹ヶ坂 地名山中に委し子細図上に記せり 右の谷に蟹の塔あり○猪鼻○山中 聚楽寺

昔古仏の縁あり 愚顔和尚開基祐天の名号あり○榎○澤

▲江州勢州國界標木 鈴鹿の峠の坂切川近江と伊勢の國境也

鈴鹿山 すべて鈴鹿の山は今の街道を挾んで南北に聳ゆ凡八百

いさゝ川

此川上を松尾川と云 一名みをの白川 倒幣役此ち撿して飲廉の設宿汎をうとゝ汲賀ま足へきう

土山
さかハてるし
鈴鹿ハ曇る間の
土山雨かふる
此洒解しかし坂といへバ
よづ坂の下れゆうに抑とれ
且つく其前後を考るに
鈴鹿坂の下の間よ土山
なし されバ
百年の
星霜
と経ば
其土山
や鹿の桜
を洗む
ろるをを

もろべし
今按よ
むかしの
街ろ
ハ今よ
遠ひ
て名ゐるど
も異ろよ
わり今茶舘
と松尾との
小の方に新宮
村ゐえハ云ゐの
こと云て新宮の
旅宿ハ此所へ経よ
新宮の小に大ゐる
坂の名を坂と云
ことをれて
考合をべし

八谷といふは鈴鹿官道の間凡廿六町往古は山城宇治より伊賀名張を経て伊勢に入る其ころは此山の内長谷といふを越えしより今の社より二町程坂下へ出る細道也是古街道といふはこの中なり

秋宮家集
すゞか山ふるの中なる君よりもきみはふりそおくれたりける

○平城天皇大同二年逆賊鈴鹿に籠て旅人を悩ます禁廷に訴ふ勅に因て田村丸これを誅す又弘仁年中に上皇と此に遮る其後延喜七年九月捕鈴鹿山群盗其張本十六人誅之と云 昔は樹木茂くしが山魅木客の栖白波緑林の窟なりしとかや 今は昇平の化にあまねく旅人も心やすく行かよふ 聖君の徳沢なり

後撰集
すゞか山いせをのあまの捨衣しほなれたりと人やみるらん これまさ

三子山 鈴鹿山の麓なり 俗に三子山といふ 是を古名片山といふて三子の峯の絶頂の地なり 伊勢の船人此山の雲のさまを見て日和をうかゞふ

坂下村 此ほとりに鈴鹿川橋あり洪水の後山の根を古町といふ

田村社 鈴鹿の坂の中なり 田村将軍の霊を祭る

かゞみ石 是は鈴鹿の山中にあり毎年二月八日注連縄を張て人を不寄 愛宕出現乃地なりといふ 境内のかざしの社は鈴鹿姫の霊なりとぞ

○たつゝ坂 髪風 すゞか山の坂の名也 此坂の長さ八丁

秋されば鈴鹿の山の嵐にぞ霧と雲とに分るゝ山

○鈴鹿神社 本殿天照大神荒魂瀬織津姫尊気吹戸主尊速佐須良姫尊相殿に座を後に倭姫命を合祭りて別号を片山神社ともいふ 県主の神社ともいふ 伊勢の斎宮の斎宮群行に鈴鹿の頓宮に宿り給ふ時は此所に鈴鹿の斎宮に入れ給ふ 此頓宮身曽貴殿ともいふ 神宮の旧跡にて伊勢路の始なれば御禊ありて斎宮群行の時の勅使の来宮にて此頓宮身曽貴殿と称して伊勢路の始なれば御禊し給ふ 頓宮の境内より八丁ばかり乾の方にあり 伏見院永仁二年春二月火災ありて今の社地に移しその旧地をとどめて本陣といふ地名遺れり

○頓宮 斎宮群行の鈴鹿の頓宮にて 旅の御よそほひ給ひたりけり

新勅撰集
いそぐともなほ越えかぬる鈴鹿山苦しき旅の衣なりけり 通俊

○すゞか川 詞花集 鈴鹿川八十瀬の波の... 皇太后宮...

○橋の弁天 弟と伊勢の海の硯のる

又は其橋板のなぎさに鈴鹿の社のつかさのとどまり是も神ありとぞ 伊勢の神宝の代々に鈴鹿の橋にてつくりたる
いよくおるとやとらひ本造の真丸まさしく合せ鈴鹿の橋にて鈴鹿川にかける 此宮守まもりぬよしやせどそこまでにしかるふ坂の下なる不ゐ橋板の弁才天をそ

田村丸誅仲成

加茂皇太神宮祭記云
嵯峨天皇弘仁元年
太上平城天皇薬子
の寵にまよひ
兄仲成が為に
ふたゝび御位を
復らんが為都
を遷んとす是に
よつて勅して諸関を
かため田村丸を大納言
として禁中をまもらしむ

上皇大に怒りて畿内
紀伊の兵を召しつれ
薬子と同輿して関東
に赴き給ふを又
田村丸を大将と
し文屋綿丸を
副将として御幸をとゞ
めむ田村丸勇の士多く夜
に掛りぬと遠く加茂明
神と祈り即鈴鹿の関を
これを遮る此に於ひて軍
陣戦ひ又は彼神の加
護なるにや叛逆の軍兵
ひと〳〵計に見えて遂に
仲成を射殺し上皇を
宮に還し奉ると云
後世田村の謡に清水の観音仏力を
著作せしハこれらのゆへなりしとぞや

本社
秋葉遥拝
大神宮
田村川

田村大明神社

まうかありやがてひらかせくおがむによつての弁才天にはあらじまがふべくもなき橋姫なるべし
又日前もどうの王ハ伊勢に住給ひしが鈴鹿の石橋にて作りなく硯を直に伊勢の海とよが
せ給ひし其かたち今に鈴鹿の社にあり石ハかこ川のむかさき世までさにりのたなり云々

橋の弁天ハ一里塚の東の橋ぎハにあり 尚関の琴のそしの不足くまーく記ス

○**山岩窟** 左の方に大きなる山を切ぬき自然の石堂にしつらひ内に阿弥陀観音地蔵を安置し其かたはらに清泉斜に流落る故に清瀧の観音と称を

坂の下驛 いにしへハ鈴鹿の山の林麓にありし故坂の下といふ然るに慶安三年九月二日の洪水にて山川田畑民屋ことごとく皇額座を始め公より修補を加へられ十町斗東へ宿をうつされ今の坂の下是也古名是を鈴鹿の驛とも云

金藏院 仁壽年中慈覺大師の開基鈴鹿山護國寺とて日光の末寺
本尊ハ薬師如來叡山中に傳教大師感得の二寸八分の尊像腹籠と云
継右ハ鈴鹿の林麓にありしが洪水の後此所へ引中興開山賓盛法印とかや慈眼大師の法嗣なり

小女溪 官道に橋二ツあり橋名同じ驛の中程と東の端とにあり

法安寺 禅宗にて石佛庚申の像あり 石工近国の名人なり

焼地藏

沓かけ村 寛文の比桃々毎し此地にて加茂盤女の歌もあり

楢の木

一里山

朝日弁天祠

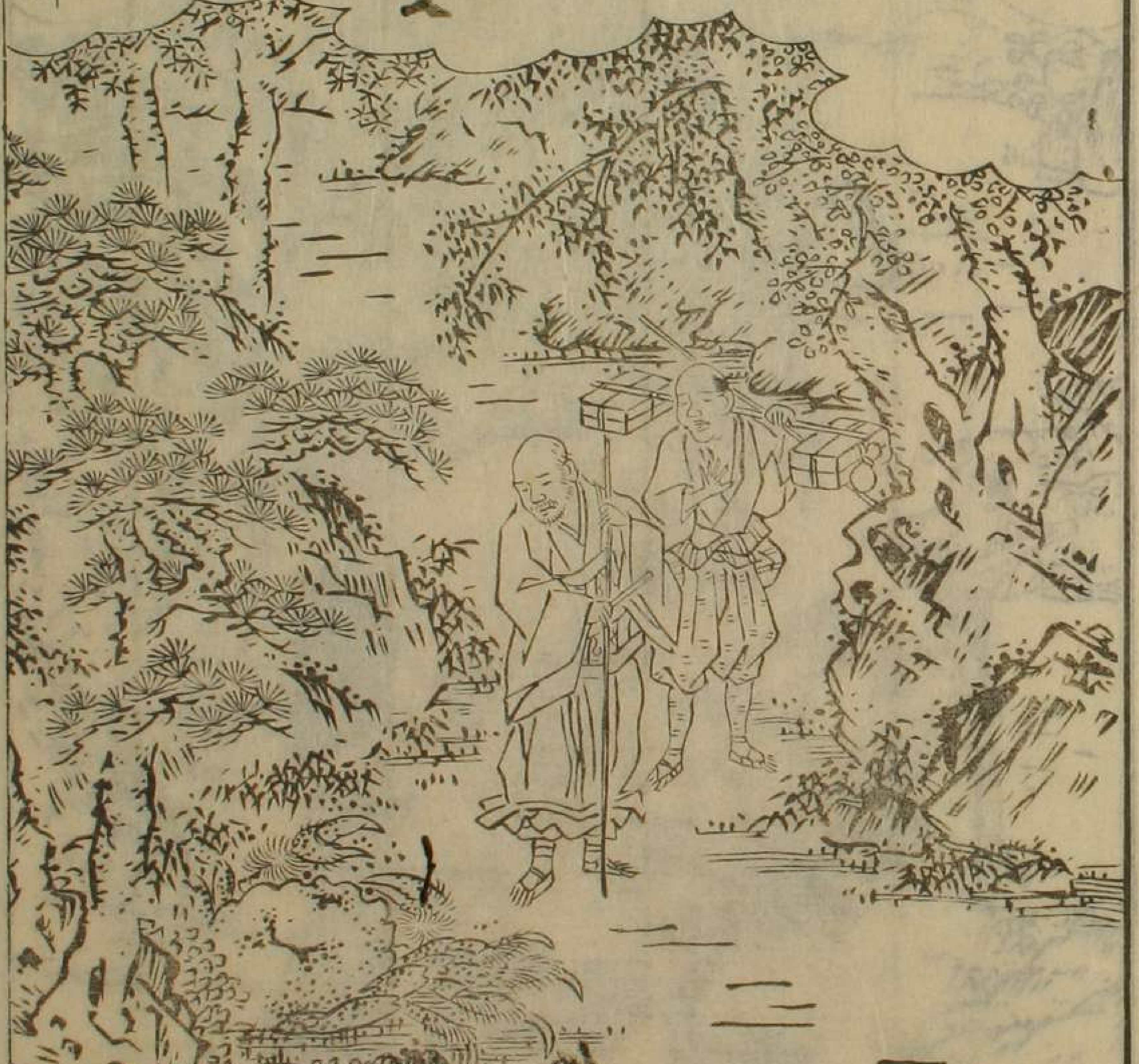
権現山 掛松の蔭にあり古居石垣のかたちあり今地の字に残れり
坐緒ありて名付しよし鈴鹿郡織にあり

四軒茶屋

蟹が坂

世傳云昔此谷に大なる蟹あり妖をなして人を損ぞ旅僧是に會て佛經を説き偽て是とお殺し其塚を築くと云

或云昔此谷ハ山賊埋伏して鬼魅妖怪を企なし人を威らく物を奪ふ賊を名て蟹といひ又の世に横行なす者なれば
なり 日本記に土蜘蛛と云ハ則賊の名之是同じ



山中

雅康卿関東街道記に
山中といふ所にてやすらひ
侍るとて
よぶこゑる
それかとぞ
きくけが山中に
おぼつかなくも
なくわかれぞ

道の傍の松に桜の
中より木ありて
喬木にしもく花を
見し

筆捨山 岩根山とも云 越前守右法眼狩野元信ハ当国の産也 一説のよし元信筆捨の俗説もいひ伝へり

羽黒山 関の中ほどより北へ町ほど小き岩山あり 但し筆捨山に連れる山なれば もしふみ出を一山名もいはぬ大石層々として嶙峋窟峨石其数を不知 荒豹熊羆の栖ともいふべし 巌中に小祠を篭り 則出羽国羽黒山をうつせしといふ 古伝のいふ権現の勧請は往昔源信忠信兄弟不開にて上洛せし時此所にてとゞめられて其難を逃れしによりて本国の羽黒山大権現に祈誓をかけて其縁を以てうつし勧請せしとぞ

亀石○天守石○布袋石○屏風岩○よきぬけが渕

○茶磨の渕 深潭あり 其外寿石かぞふるにいとまあらず 鈴鹿の里を総名とぞ

一ノ瀬村 平の盛信の古案に二の瀬とぞありもあり ○一ノ瀬川 此水上ハ桜谷川・沓掛川より 鈴鹿山より流れ出て八十瀬となる 一ノ瀬川と云て関川へ入 川名なり 一の瀬の流れなるべし

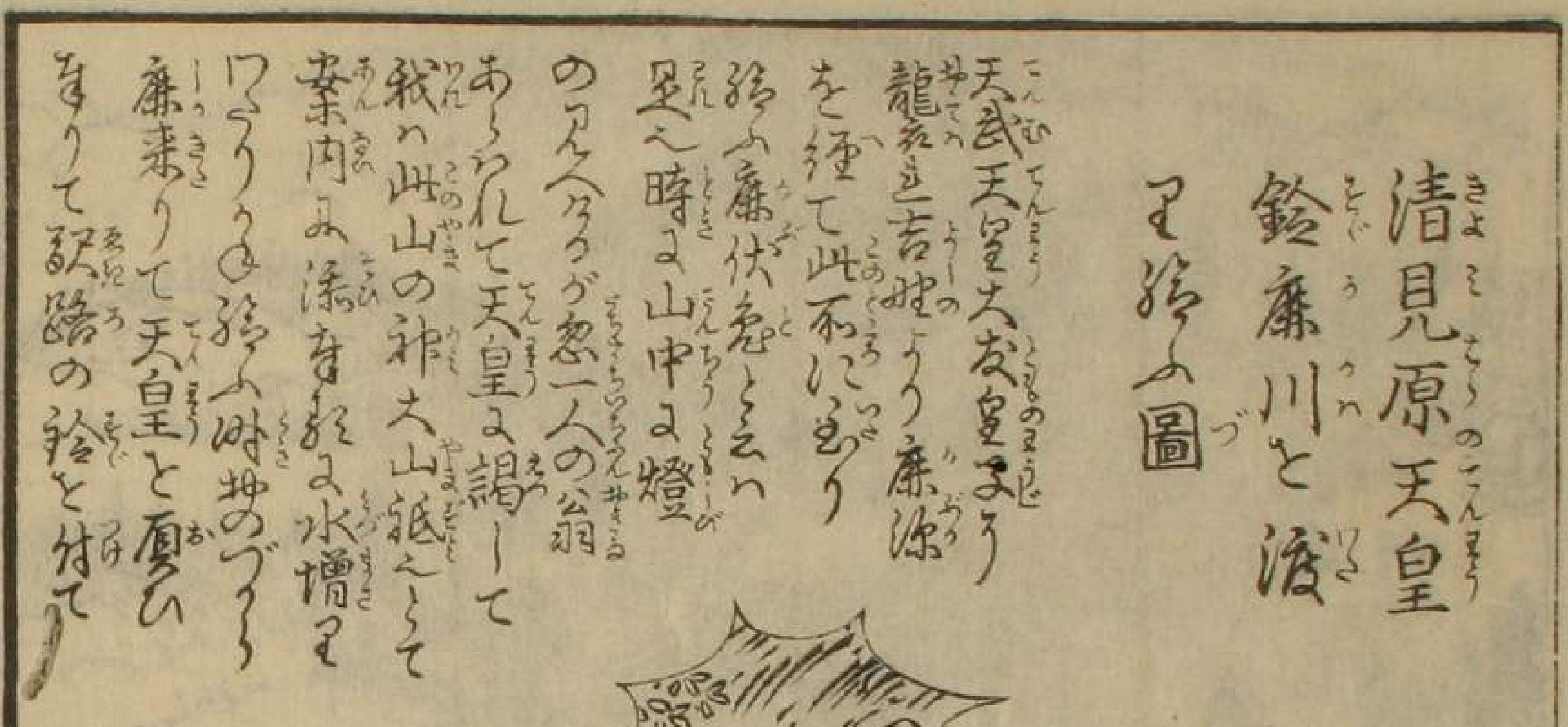
○大黒石○恵比須石

○長持石○ころび石 姿の似たるのみなり

関 今駅宿の名とす 古へ鈴鹿の関とあり 関屋の跡 関の駅西の入口より二三町東を中木戸町といふ 此辺人家の間に細き小路を南へ通る 不着の関屋の跡なる よしいひ傳ふ○御影堂塚 ○火縄 名産なり

鈴鹿峠
田村明神
鈴鹿山
鈴鹿権現社

大山祇社


清見原天皇
鈴鹿川を渡
り給ふ圖
天武天皇大友皇子より
難を避て吉野より鈴鹿
を経て此所にいたり
給ふ鹿伏兎と云ハ
是ハ時に山中に燈
のなく人々なげきし一人の翁
あらハれて天皇に謁して
我ハ此山の神大山祇なりとて
案内に添奉り水増て
けるゆへ給ふ此時のかう
鹿来りて天皇を負ひ
まいりて此路の名を付て

またもぬ国て
鈴鹿と号云云
此地をさして
祭りて
油火大明神
となりけり
江州甲賀
郡にあり

此郷の産物
又坂の木櫛
坂の弓弦と
て北畠数具
々の記に見え
より
又可鰤鰕
乱て清音之
こゝろ〳〵と小石
流るゝ谷川り
かじかなくなるその落合

清滝観音
坂の下
古名鈴鹿駅

鈴鹿関跡 拾芥抄云逢坂。不破。鈴鹿。は日本の三関之云 續日本後紀曰 桓武天皇の時始て建後醍醐天皇の御宇に関所停止 東海道へ鎮撫使等往通しあつまり崇神帝の朝崇峻帝聖武帝天武帝の朝にあきしも皆伊賀路より伊勢路へかゝる 國史にみえたり近江より伊勢の鈴鹿へ通路せしもさ光孝帝の仁和二年新道を開かれし是なりなり昔の鈴鹿の関ハ上の方にありしにや坂の下宿のうしろの川の南に関趾基ありへる地名を是も後の関屋の跡といひ伝へり又建仁二年水無瀬殿の歌合長明が記りなるところも鈴鹿の関ハ今の関宿にあらずと見えたり関宿の中町に関屋趾のほとりに地名あり永禄十二年織田信長伊勢國の関所を停止とも関宿にある関所なりし鈴鹿の関を九度本をこゝへうつして九関の山號地蔵堂にのこれり当宿の新城あつひまた新所とよぶなり悉領鈔附録に小松内府重盛公の十八世亀山の城主関安藝守盛信武勇をもてしるゝ瀧川左近一益と合戦の時此地に新城を築き防き戦ふこれもさえ亀四年のことなりとぞ又勢陽府志には天正十一年八月末徳に新城を築くとあり其ことも同じうまて年月地名ハかハれり遊て考ふべし

地蔵堂 九関山地蔵院宝蔵寺といふ。亀山略記云真言流開山應宜僧都也若捺白比丘尼 八百歳の比丘尼 自筆に宝蔵寺と記せる額あり又宗長紀巳の記にも地蔵のある像ハ行基の作とし鈴鹿郡誌にはまた同元年の建立にて其後田禄せり今の堂ハ元禄九年の建立なり勢陽府志には地蔵薩埵 坐像東向 傳教大師の開基其後文應年中火焼此時尊像火滅せしが文明年中ある像本堂ともに再興あり此時一体開眼の導師とぞ此後又田禄ありて元禄九年建立なり 勢陽府志

えびす桜

新後撰集 いせの勅使よりもろひて鈴鹿の関を越るとて

えびすゐねこれやとくみ関すゑんふり捨てる花のうけるゝ 定家

筆捨山
本名 岩径山

此橋ハ地蔵堂より東町ぐちの西南側小橋なり去る済度茶のりの也を其古跡なりと云へ
エゾと云ハ神代文字のえぞうゐぬの言をとりてゐひつて云へるなるべし蝦夷人の杖
をさしうがすひ出るとも又西行の杖を切る跡の枯木より芽を出しうれ
など勢陽府志の説を信じがたし

久我村白石明神 此神ハむかし小松内大臣重盛公の御子資盛をまつりて此所へ流され
てようつりひ来る神なりとぞ其末孫又ツぬまうき又ケ所に城郭を
うきえへらせてしと云関の駅より城山となりしとも ○**城山** おうりいへるなどしとぞ今古井の跡ありと云

御新婦塚 関長門守妻の塚なり関氏が家老
明若彰ちく建て神戸氏の女なり ○**三日城** 信長の家老立川盛帖 三日籠城せし所なり

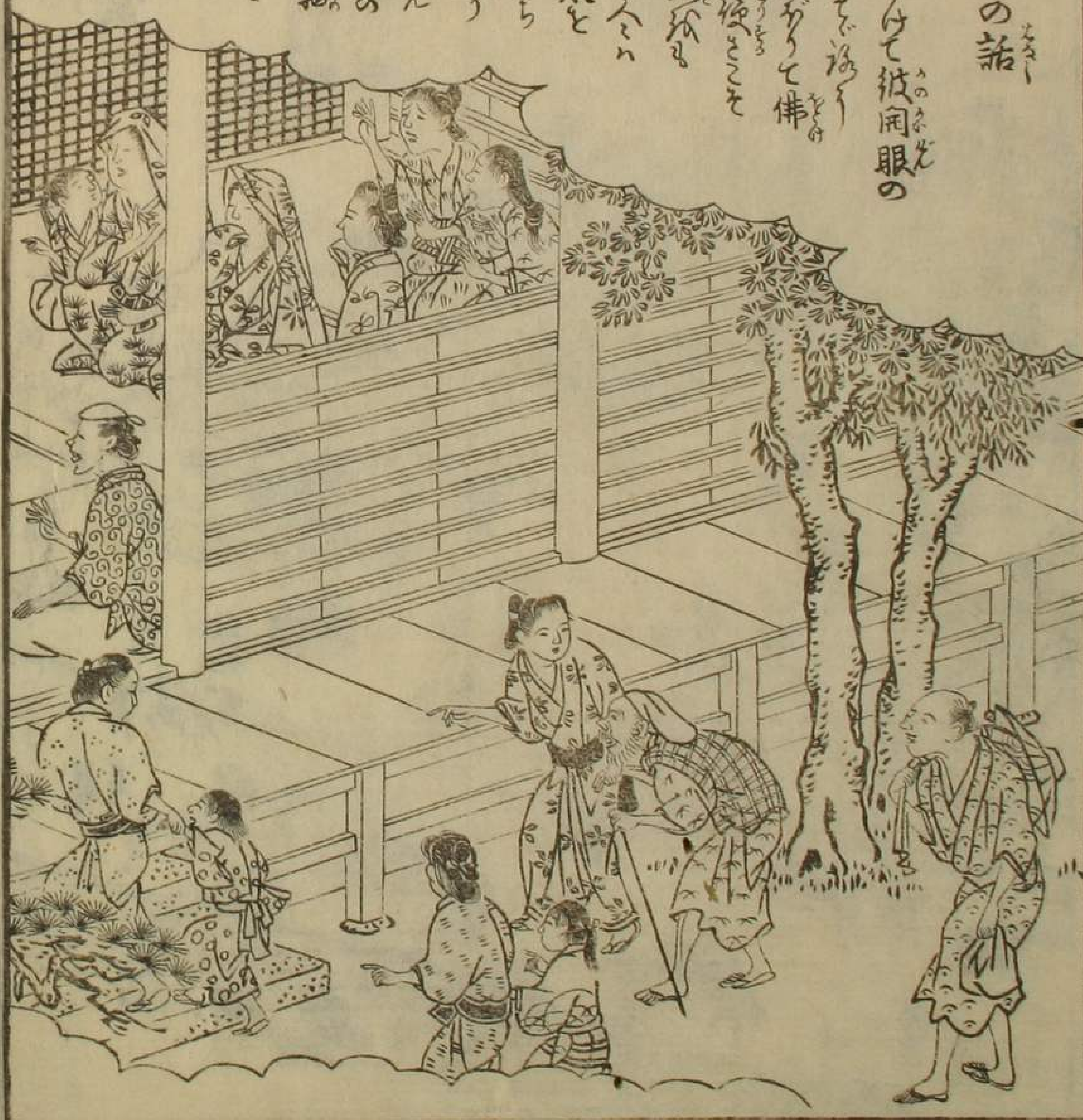
和琴の橋 上古より天子の宝物に玄上又鈴鹿(玄上ト云)和琴あり其琴を
此鈴鹿の橋にて制まつり故に今に其跡を琴の橋と号づくり 禁秘
抄云累代の宝物なり但毎年御神楽に用之 ○江次第云和琴鈴
鹿累代帝王の渡物也又平家物語にも見えたり 当宿の新橋と中町との
間の小川に架る橋をさいかのはしといふ又相の木島といふ田の字あり案ずるに南の雲明神の森のひがし
鈴鹿郡に出づる又関宿の駅路とそ今往来の南田まの通ふる所にやどやといふ地名あり
其名細の川の橋又紹巴の記にハ一ノ瀬の布天橋のあとせりとこの亀山の宿営亦擬う
引くとへども琴の橋ハ此地を足とせんかこに再びここに出を

鈴鹿川相の古木の丸き橋これりや琴の音にかよふらん 俊成

川上山瑞光禅寺 寺内に権現森といふあり
此和琴の建武元年参を縁先のうし般若心経に見えたり 亀山略記云此寺ハ曹洞宗應永年
中の開基寺領六石三斗中興開山ハ

同異本開眼の話

一休の関東下向を見うけて彼開眼の導師を乞ひれバ一休きそ承り尊像の一隅甚く(?)のぼりて佛のかしら人まゝてうるよ小便させて開眼ハをハれりとて終ゐも見むくしてゆうり消しへ人それ乞をたふてく怒りて水をそゝぎ清めしれバたちまち其人ハ物怪つきて怒りてゆきちれし心となりんいふをハ天下の老法師の秘目をひらせたびる物と狂ふてりしれる人とさゝくひさゝる女面見そうへりて其尊に怒るをあハれんて彼和尚の引けるを給



ゆりてまゝくの事をいひて狂ひとみれて和尚このくてびハ櫃鼻を拝て是を地藏の首よ纏ひ玉ひてほうたる題しも幼拝念しとは思へどももしやの奇特よ物ぐりして数へのおくくれ纏ひしうば物怪ハ去りねかくて緩和尚俳諧の時其まとひたる解く是を又今のをまづりけ玉ふなりとぞ

豊屋和尚之従廉郷城主瑞光禅寺旧ハ関駅の會下村万松山永明寺の別院なりとて境内ニ
関長門守張居関の方往の居地永明寺焼亡の後此地に寄附せらる會下村七十石余のうち今
に此寺の支配なり又永徳年中乙未の古鬼簿あり又天正十一年関宗一
盛湯の古霊あり又天正二十年の古證あり○勢湯府志云瑞光寺ハ川上村にて関の中町
二町ハかたり今ハ従て寺地計なり
○按るり川上村ハあらじ　湯津盤村なるべし

湯津盤村 前条に見合とすべし今人家なし

湯津盤の森
霜ふく川ゝをわけてをむ月のゆつるれむしにゝけさやけさ　法眼紹清

清岸山福蔵寺 関駅の東二三町ばかりにあり今ハ跡ありて小野村の寺とす　縁をよりて小野村ともいふ
瀧山男記ニ坂本西教寺流鐵田三七信孝の香花所にて家臣大塚長政がこん里うちなり

追分 東海道と京街道との追分なり　大なる井常夜燈を建る方来宮道なり

関川 仮橋ハ九十間あり此橋九尺　貞享二年乙丑十二月の定めあまりともいふ　関ノ木佐村か架る

古駅 うちまや村にあり　経廉郡賊の古廐と云神宮幣馬のやどりし所也　名ありあり
今ある社を建て宮造りのおそれりの今ハ即神るの家なる印とて
神へまいりあふ出村と楠原村との間経廉奄本郡の境なり　○**楠原村** 此村の東小川あり
水上ハ円郡福徳村の山奥よりながれ出る　○**天神社** 林村にあり
延喜式経廉郡十九座の中志波加支神社とぞいへる是なり

杉口 一名松葉　明應中林誠中守祐好の城址なり

観音堂 大同元年の草創といへども天正二年勝川一益兵火にかけて今は只

中縄 法泉慶長乙未の古記に元和二年丙辰城主が此村を置年貢赦

兎の地之 この村より西南の方に山岩嶺山嶽あり　伊勢国中の名山なり

椋本 村中円江寺といへる寺の庭に大なる椋の木あり
中縄の南の方にて往来の大路へ安濃郡をとし若出椋本ハ安濃郡なりし出名目て東おし小の方よりハ又奄藝郡之前此辺よりあの松原へ往来しこる里の名とこゝふ

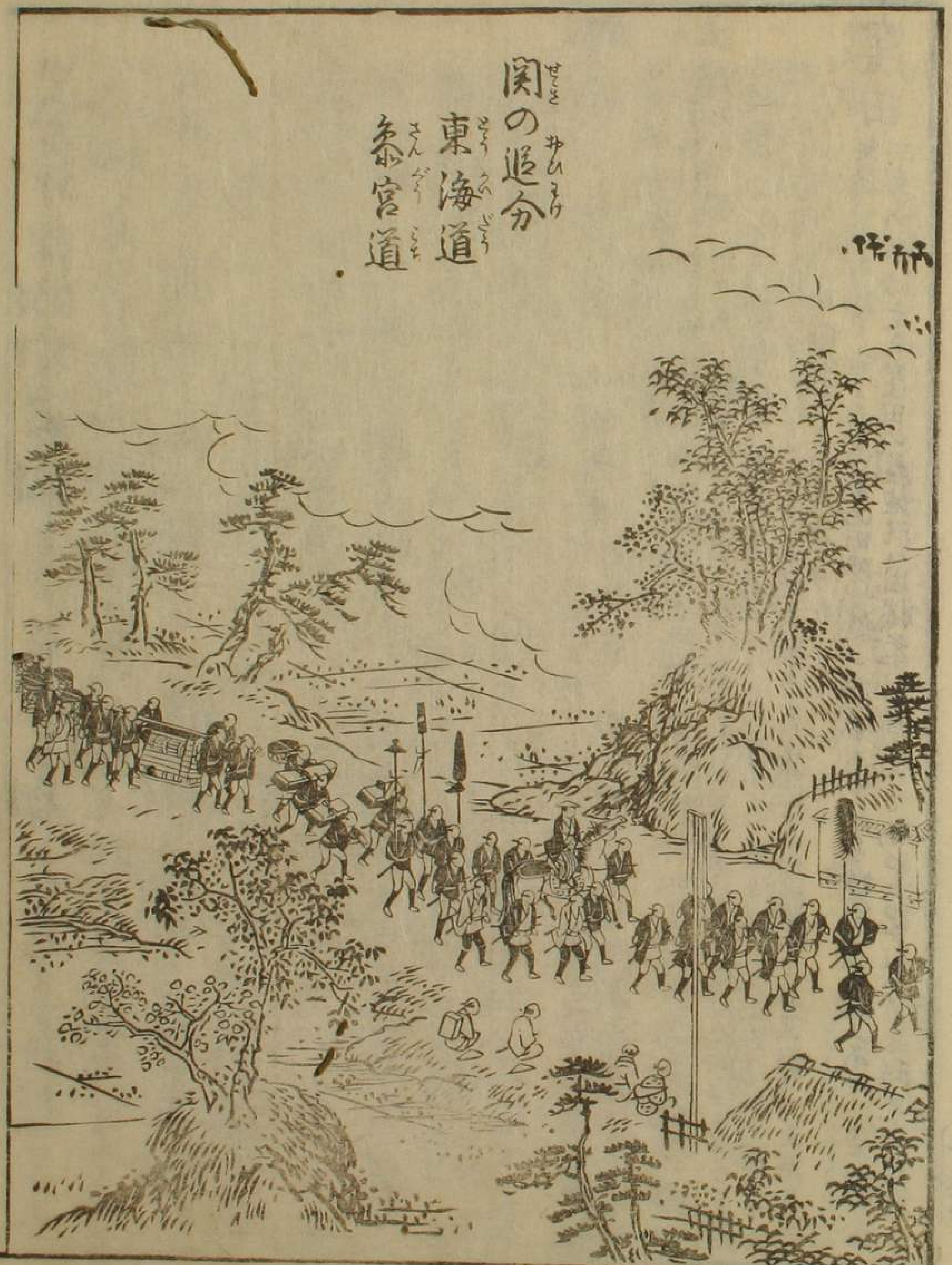
片淵城址 椋本東西の野中に片淵とて前城郭関所ありし跡之本稜来に詳

髙野尾 髙飯尾と云其名ハ此村の天王の社あり祭る神素盞烏尊あるハ号けしゃ中比ハ髙野尾と云すもゆへあり

豊久野 ・恵日堂記に云雄略帝の御時丹波国より豊受大明神を勢州へ遷し奉る時経廉の神戸よりして此野に御宮を作り休らせ給ふ御跡なれば等由気野ともいふ之　トヨウケトユケハ通音の即今の郷名の二町つかりなり　其古名あり往古も一里ばかりの松ぞやしなりとぞ

銭掛松 髙野尾の東の曠野に年久しき一株の松あり是即恵木

せき川


関の追分
東海道
参宮道

いふ吉祥宮の御跡をうしなはざる為とてしるしの松とうへて小祠もありけるが小祠も亡て松のミ残りたるハ人々宮に来りて吉祥宮を遥拝し御供料として松の枝に銭をかけて米穀のさちへを祈りしものなれば銭掛松とハ呼り○又伊勢国度会郡背図帳残篇曰豊国野比呂宇食神霊者豊斟渟尊之此間宇食○是をもつて按ずるに昔此野に豊斟渟尊の社ありしが後此社のうせし後其跡へ松を植て銭掛松となりしならん 両説の内圖帳の方も味ありて從ふ今の往来の道ハ明應七年已後のことなりとす一身田山内粉川羽鶴老人銭掛松の一説ありて其意を俳優の文にも作り音節調子にても其意人の付るものありて其遙かにも集られしを称ふとも爰に呈す

野崎 この村舊ハ山田井也 和名抄に八田井とありまた延喜式神名帳に志為神社とあるハ即山田井ある出の御厨八王子と云ハ是之 此里今操射挪銭の店多し

土岐の百塚 むま塚とも云 南方記傳に南朝正平廿四年小畠内大臣顕能土岐大膳をまつ兵と伊勢国に合戦して土岐か兵敗軍せるといへるハ此村の中なりける窪田村西の入口一町斗西の畠の中往来の大路の北りハの塚ありむま塚又土岐か死たる跡の塚とも云楠とたゝかひの木とも伝へもしにうへより○土岐大膳をまた康政も窪田にて右馬頭より大膳をまとゞかうりよき人なれば馬塚の義もあるべきなり

窪田 此村の内馬場といへる町の東の田地の字に政所ありひと坂の内などいふあり○東鑑文治三年の佐治文に窪田の庄地頭ハ因幡前司廣元とあるとて又れば[illegible]政所の當村なり

ありしハ文治より前のことならん此南の山際に昔東光山祥若寺と云伽藍の跡あり

光明山安養寺 本尊阿弥陀佛又基作十王堂あり 祥若伽藍廃たる後にて行基菩薩の開基也東福寺佛通禅師再興して其後先言の光賢阿闍梨に此寺を譲る文禄の頃破壊して今小地なれども其跡のこりて先言僧住持せり○一説佛通禅師を光賢にゆづりて後會郡明野が原に住り寺中に神明の社ありて古神宮寮府の米穀を茶湯を吾しめ済孫を濯しむ其周縁に寺もありとぞ尚明理の余に[illegible]

六大院 寺中六大院村にあり後柏原天皇勅額六院を並て寺領百石を賜せられしが慶長年中安濃津専修寺へ是ら六院ともに移し今ハ大宝院の萬壽寺のみなり

空也堂 冷井山西念寺 此村の東にあり これを守る家三又新あり冬に至れば讃語を唱へて鉢扣の修行に出るなり京空也寺に同し上人自作の像甚古物にて鉄口かたはれを証とし又八ッ股の鹿の角と什物とせり 縁起あり委くハ京都空也寺に遠ふるなるべし平定盛の苗なりと 毎年十一月十二日法るを行ふ

坂部村 窪田村より一身田の標石あり これも坂部村より大路を二丁計南東の小橋あり昔来を御禊洲橋とも禊洲手橋ともいふ

御禊洲斎塚一宮 昔斎宮下りましし時御例として此川の洲にて水禊し斎殿へ入らせ給ふといへる今ハ畠となりて斎居の跡なこの橋より一町計東田の中に塚ありて名の松あり里人よぶ塚とよびて俗諺ともありこれも斎塚なるを

豊久野
銭掛松

自然軒
鈍全

訛りて又橋より二町ひがし茱屋村の西の入に小の方よ在る森ありて田の中よ森あり（これ窪田八郷の一の宮うて神名帳奄藝郡事忌社とも是なりる此の額う春日とあるハ後世の誤りなり右杉川氏事忌考に委し）

一身田髙田山專修寺 下野流一向宗の本山にて本堂廿四間四面祖師を安置を侍ふ十八間四面の堂ハ阿弥陀如来也（一寸八分閻浮檀金善光）

（同寺號）髙田といふも下野國にある寺の名なり 往昔先佛上人とやなるハ下野國の産にて國勢をもとじんとしが深く親鸞上人を帰依し剃髪して眞佛といふ唯授一人の口决を上人に得て一向專修専念の旨を弘め佛寺を創立し髙田專修寺といへり 眞佛上人より八代ハ下野國にありしが第九代大僧都法印眞恵ハ定顕上人の舎弟にして中國佛法の大願を起し加賀越前近江等を經歴して伊勢國にいたり先皆く此を化度し初ハ朝明郡大矢智村光明寺に居し其後三重郡小松村中山といふ所に寺院を建立して移轉せらるゝ然るに奄藝郡黒田村哲誓祐といふ者急う

其二

招請せられて一身田に移らる于時寛正五年甲申上人卅一歳 按ずるに此地は開山
親鸞の由緒深くして昔親鸞上人末宮の辺此地を入江の磯辺にありける頃聖人西の方
聖徳太子の御影に詣て流れ寄る土器を御覧ありて末の世は浪の音も如是尼々の音あり
依て識識の霊験あるべきを悟りて永く住居と定めらる寛正六年乙酉真恵卅二才
下野国高田専修寺を伊勢国奄藝郡一身田に移し給ふ是より一身田を本寺とし
野州高田を讃高基の霊地として掛所とし
後土御門院勅願所として宣旨被下置如左

高田専修寺門流事

如先々相続可被興生海度有其外諸国門徒可有進退之旨
天氣所候也仍執達如件

文明九年　真恵法房　右大弁判

又信長公勢州乱入の時当寺十二世堯恵上人と甚睦くして勢州平
均の謀など議せらる依て当寺へ書送る所の禁制の札如左

高田専修寺門跡　当寺境内不可陣取事
放火之事　右之條々於令違犯者可為厳科者也

天正四年　信長判

此村の名は一身田といふは三代実録元慶三年丙寅六月勅参河国播豆郡荒廃田
一百町賜五子内親王為一身田これによりて考ふるに一身田とは口分田寺田に対して其一身
又賜ひ下されし田地の名と見えたり昔此田を賜ひて後世地名とせしなるべし
境内に嬢媛樵といふあり新造し薬刀の持ちをやしなせり

三軒茶屋　平野村の出御なり　○中野　大乃巳所村の支郷なり

大乃巳所神社　式外の神なり　中野の森の中にあり　今は天素女大明神と称せり　獅子頭一口あり

太部田　上濱とも云　下津の町できその小の入口也　右名も小丹又雄丹ともいふ東南海浜なりしが明応七年大地震の高波に流さ

小丹浦　或は鳴呼見の浦とも云　是塩屋といふ所なりし又今の継来へうつせり　順徳院之御製に

夫木　みるめかる蜑のすみかの白浪に日々けしもなくひくそみせる風

勢陽府志に志广の国の内として当国飯野郡井口麻績神社の条下に出せり
○按るに三と二も有る者通にして二の浦のうちなるべし　尚考ふべし

塩金明神　塩屋といふ所にあり　延喜式神名帳安濃郡小丹神社といへるは是也　旧記に景行天皇四十九年八月癸酉祭る云云　社記に詳也

伊勢参宮名所図会巻之二終